西晋文人関係論

――陸雲と厳隠――

佐藤利行

【キーワード】西晋・陸雲・厳隠・文学集団

一

文学研究において、その当時の文人の置かれていた環境を知ることは、非常に重要なことである。殊に、文人を取り巻く人々との交遊の状況を把握することは大切な作業となる。以下、小論では西晋の文人である厳隠（字は仲弼）なる人物を取り上げ、特に陸雲（字は士龍）との関係について見ていきたい。

二

厳隠、字は仲弼は、呉郡の人である。正史にその名を見ることはできないが、『世説新語』および劉注によって、その人を知ることができる。すなわち、『世説新語』賞誉篇には、張華が褚陶に会った後で、陸機に向かって「東南の寶は、あなた方（陸機・陸雲・顧栄）で尽きてしまったと思っていたのに、今また褚陶に会おうとは」と語ったという次に挙げるような話があるが、その劉孝標の注に引く『褚氏家伝』に「厳隠」の名が見えるのである。

張華見褚陶、語陸平原曰、君兄弟龍躍雲津、顧彦先鳳鳴朝陽。謂東南之寶已尽、不意復見褚生。陸曰、公未覩不鳴不躍者耳。

張華は褚陶を見て、陸平原に語りて曰く、「君が兄弟は雲津に龍躍し、顧彦先は朝陽に鳳鳴す。東南の寶は已に尽きたりと謂ひしに、意はざりき、復た褚生に見はんとは」と。陸曰く、「公は未だ鳴かず躍らざる者を覩ざるのみ」と。

此の条の劉注に引く『褚氏家伝』にいう、

陶字季雅、呉郡銭塘人、褚先生後也。陶聡恵絶倫、年十三、作鴟鳥、水碓二賦。宛陵厳仲弼見而奇之曰、褚先生復出矣。

陶、字は季雅、呉郡・銭塘の人、褚先生の後なり。陶は、聡恵　絶倫、年十三にして、鴟鳥・水碓の二賦を作る。宛陵の厳仲弼は見て之を奇として曰く、「褚先生　復た出でたり」と。

聡明並ぶ者のない褚陶を見て、厳仲弼が「褚先生（褚少孫）が再び現れた」と言ったというのである。

さらに、『世説新語』賞誉篇では、此の話のすぐ次に、以下のような話が載せられている。

有問秀才、呉舊姓何如。答曰、呉府君、聖王之老成、明時之儁乂。朱永長、理物之至徳、清選之高望。厳仲弼、九皐之鳴鶴、空谷之白駒。顧彦先、八音之琴瑟、五色之龍章。張威伯、歳寒之茂松、幽夜之逸光。陸士龍、鴻鵠之裴回、懸鼓之待槌。凡此諸君、以洪筆為鉏耒、以紙札為良田、以玄黙為稼穡、以義理為豊年、以談論為英華、以忠恕為珍寶。箸文章為錦繡、蘊五色為繒帛、坐謙虚為席薦、張義譲為帷幙、行仁義為室宇、修道徳為廣宅。

秀才に問ふもの有り、「呉の舊姓は何如」と。答へて曰く、「呉府君は、聖王の老成、明時の儁乂なり。朱永長は、理物の至徳、清選の高望なり。厳仲弼は、九皐の鳴鶴、空谷の白駒なり。顧彦先は、八音の琴瑟、五色の龍章なり。張威伯は、歳寒の茂松、幽夜の逸光なり。陸士龍は、鴻鵠の裴回、懸鼓の待槌なり。凡そ此の諸君は、洪筆を以て鉏耒と為し、紙札を以て良田と為し、玄黙を以て稼穡と為し、義理を以て豊年と為し、談論を以て英華と為し、忠恕を以て珍寶と為す。文章を箸して錦繡と為し、五色を蘊めて繒帛と為し、謙虚に坐して席薦と為し、義譲を張りて帷幙と為し、仁義を行なひて室宇と為し、道徳を修めて廣宅と為す」と。

劉注によれば、秀才とは「蔡洪」のことである。蔡洪については、『晋書』巻九二・文苑（王沈）伝に、

元康初、松滋令呉郡蔡洪、字叔開、有才名。作孤奮論、與釋時意同。読之者、莫不歎息焉。

元康の初め、松滋の令　呉郡の蔡洪、字は叔開は、才名有り。「孤奮論」を作るに、「釋時」と意同じ。之を読む者、歎息せざる莫し。

と見えるだけである。『世説新語』には、ここに挙げた賞誉篇の他に、言語篇にもその名が見え、注に引く『蔡洪集録』に、

洪字叔開、呉郡人。有才辯。初仕呉朝、太康中、本州従事、挙秀才。

洪、字は叔開、呉郡の人なり。才辯有り。初め呉朝に仕へ、太

康中、本州の従事たり、秀才に挙げらる。

といい、同じく注に引く王隠『晋書』には、

洪仕至松滋令。

洪は仕へて松滋の令となる。

とある。この呉郡出身の蔡洪に、「呉の舊姓はどのようであるか」と問ねたところ、洪は、呉府君（呉展）、朱永長（朱誕）、厳仲弼（厳隠）、顧彦先（顧栄）、張威伯（張鳴）、陸士龍（陸雲）の六人を挙げて、それぞれの人物の勝れた点を列挙し賞賛している。ここに厳隠と陸雲とが並んで出てくるのであるが、この二人の関係を示す資料が次に取り上げる書簡である。

三

『陸士龍文集』には、陸雲が此の厳隠に宛てた書簡「與厳宛陵書」が収められている。先に挙げた『世説新語』賞誉篇の「有問秀才、呉舊姓何如、云云」の条の注に引く『蔡洪集』には、

厳隠字仲弼、呉郡人。禀気清純、思度淵偉。呉朝挙賢良、宛陵令。呉平、去職。

厳隠、字は仲弼、呉郡の人なり。禀気　清純にして、思度　淵偉なり。呉朝に賢良に挙げられ、宛陵の令となる。呉の平ぐや、職を去る。

とあり、「厳宛陵」とは宛陵の令であった厳隠であることが分かる。それでは書簡の内容を見てみよう。

與厳宛陵書（厳宛陵に與ふる書）

少長之序、禮之大司。晩節陵替、舊章残棄。瞻言令典、既慕欽承。仰憑高風、実副邦民。謹奏下敬、以藉虔款。思復未遠、庶免悔吝。

少長の序は、禮の大司なり。晩節　陵替し、舊章　残棄す。令典を瞻言し、既に欽み承けんことを慕ふ。仰いで高風に憑り、実に邦民に副はん。謹んで下敬を奏し、以て虔款を藉す。復た未だ遠からざらんことを思ひ、悔吝を免れんことを庶ふ。

「少長の序は、禮の大法です。（しかし）後の世になると次第に衰え、古えの法令も廃れてしまいました。古えの善き教えを遠く思い、謹んで継承したいと願っております。仰いではあなたの高き風格を頼み、まことに邦民の願いに副わんことを思っております。謹んで愚見を奏し、わたくしの本心を申し上げました。（手のつけられない状態にまでなっていない）今のうちに元に戻すことを思い、憂慮することのないようにと願う次第です」とい

う内容の此の書に対して、厳隠からの返書が寄せられている。

厳宛陵答書（厳宛陵の答書）

奉詠美旨、流風綽遠。復禮興仁、命世之作。獲尚歯之況、無尊賢之報、抱此永懐愧歎。何有君子弘道厚文無施。是用釈筆、帰于神要。

美旨を奉詠するに、流風　綽遠なり。禮に復り仁に興すは、命世の作。尚歯の況を獲るも、尊賢の報無く、此れを抱きては永く懐ひ愧歎す。何ぞ君子の、道を弘め文を厚くして施す無きもの有らんや。是を用て筆を釈き、神要に帰せん。

「お便りをいただきましたが、（あなたのお手紙には）先人の遺した美風がのこっております。禮に復り仁に興すことは、名世なる者の努めです。すばらしきお便りを頂きながら、それにうまくお返事することもできず、このことを思ってはいつまでも愧じいるばかりです。どうして君子であって、道を弘め文を厚くして、施すことのないものがありましょうか。このようなわけで筆を擱き、あなたのお考えにまかせる次第です」。「美旨」（すばらしき考え）とは、陸雲からの書を指して言ったものである。

ところで、「少長の序」すなわち、年長者と年少者との間の守るべき秩序に関して語られている此の書簡と同じような内容のものが他にも見られる。「與張光禄書」「與朱光禄書」がそれである。はじめに「與張光禄書」を取り上げる。

四

與張光禄書（張光禄に與ふる書）

長幼之序、人倫大司。季世多難、失敬在昔。敢希令典、求思自邁。謹奏下敬、以藉虔款。

長幼の序は、人倫の大司なり。季世　難多く、敬を在昔に失ふ。敢へて令典を希ひ、求めて自ら邁かんことを思ふ。謹んで下敬を奏し、以て虔款を藉す。

「長幼の序は、人として守るべき大きな努めですが、季の世になって困難なことが多く、目上の者を敬うならわしはすでになくなりました。なんとか善き教えを願い、みずから努めて行きたいと思っております。謹んで愚見を奏し、まことの心を述べた次第です」。書簡を宛てた「張光禄」とは、張華のことと思われる。『晋書』巻三六・張華伝には「右光禄大夫・開府儀同三司・侍中・中書監・金章紫綬に拝せらるるも、固く儀同を辞す」とあり、「斠注」に引く『晋起居注』（『御覧』二四三）に「（永平）元年、詔して曰く、中書監光禄大夫」と見える。

次に「與朱光禄書」の方であるが、以下のような内容の書簡である。

「與朱光禄書」（朱光禄に與ふる書）

少長之禮、教化所崇。中葉陵遲、舊章廢替。追惟前訓、思遵在昔。敢慕高義、謹奏下敬。

少長の禮は、教化の崇ぶ所なり。中葉に陵遲し、舊章　廢替す。前訓を追惟し、在昔に遵はんことを思ふ。敢へて高義を慕ひ、謹んで下敬を奏す。

「少長の禮は、教化の尊ぶものです。（しかし、それも）中葉にしだいに衰え、古えの禮典はすたれてしまいました。わたしは前人の訓えを追慕し、昔に遵いたいと思っております。それで敢えてあなたの高義をお慕いし、謹んで愚見を申し上げた次第です」。手紙を宛てた「朱光禄」についてはよく分からないが、『晋書』巻七六・顧衆伝に、

顧衆字長始、呉郡呉人、驃騎将軍栄之族弟也。父祕、交州刺史、有文武才幹。衆出後、伯父早終。事伯母以孝聞。光禄朱誕器之。

顧衆、字は長始は、呉郡・呉の人、驃騎将軍栄の族弟なり。父は祕、交州の刺史、文武の才幹有り。衆　出でて後、伯父　早く終はる。伯母に事へ孝を以て聞こゆ。光禄の朱誕、之を器とす。

とあり、或いはここに見える朱誕を指すのであろうか。もしそうであれば、先に取り上げた『世説新語』賞誉篇の「有問秀才、呉舊姓何如」条に、陸雲・厳隠とともに挙げられている朱誕（字は永長）のこととなる。おそらく陸雲らは「少長の禮」「長幼の序」といった共通のテーマのもとに、書簡を通して議論のやりとりをしたのであろう。

四

ところで当時の社会にあっては、権力者を中心とした文人集団が形成されており[1]、文人達はそうした文学集団に所属して、それぞれの活動を行なっていた。集団においては時に文会が催され、そこでは詩文が交わされたり、或るテーマのもとで談論が行われたりということがあったようである。

次に挙げる『漢書』をめぐる潘岳と陸機との詩は、ともに賈謐のサロンにおける同作の作品であると思われる。初めに『初学記』巻二一に引かれる潘岳の詩を見てみよう。

於賈謐坐講漢書詩（賈謐の坐に於いて漢書を講ずる詩）

理道在儒　道を理むるは儒に在り
弘儒由人　儒を弘むるは人に由る
光矣魯侯　光かしい矣　魯侯
文質彬彬　文質　彬彬たり
筆下摛藻　筆下に藻を摛べ

席上敷珍　席上に珍を敷く
前疑惟辨　前疑を惟れ辨じ
舊史惟新　舊史を惟れ新たにす
将分爾疑　将に爾の疑ひを分かたんとし
既辨爾疑　既に爾の疑ひを辨ず
延我僚友　我が僚友を延き
講此微辞　此の微辞を講ず

詩の末聯に「延我僚友、講此微辞」とあることから見て、此の坐には集団のメンバーが集まっていたものと思われる。[2] 次に陸機の詩であるが、此の詩は本集には収められておらず、『北堂書鈔』巻九八に引かれている。

講漢書詩（漢書を講ずる詩）
税駕金華　駕を金華に税き
講学秘館　学を秘館に講ず
有集惟髦　集ふる有るは惟れ髦
芳風雅宴　雅宴に芳風あり

第三句の「髦」とは、俊士のことで、ここでは賈謐の坐に集まった俊逸の士をいう。要するに、賈謐の坐において『漢書』が講義され、その後そこに集まった人達が、それぞれの感想を詩に詠いこんだのであろう。

『晋書』巻九二・左思伝には、

秘書監賈謐、請講漢書。
秘書監賈謐、『漢書』を講ぜんことを請ふ。

とあり、賈謐が左思に『漢書』の講義を依頼したことが記されている。賈謐の招請によって左思が『漢書』を講義し、その後で同じ坐にいた陸機・潘岳らが先の詩を作ったというのかも知れない。

これは賈謐の文学集団における文会の例であるが、こうした文会は、それぞれの文学集団において催されていたわけで、陸雲の書簡に見られる「少長の禮」「長幼の序」といったことも、恐らく張華の文会で議論されていたものであろう。その文会での議論を、引き続き書簡のやりとりを通して行なっていたのではなかろうか。

五

以上、この度は陸雲の書簡を中心に、主に厳隠なる人物との関わりを見ていった。今後さらに他の文人達との関係をも見てゆき、西晋時代の文人を取り巻く交遊の状況、文人の置かれていた環境について考察を続けたい。

【注】

①拙著『西晋文学研究』（白帝社）第一章「西晋の文学集団」を参照。

②陸機陸雲兄弟は、潘岳とともに賈謐の「二十四友」のメンバーであった。「二十四友」については、『晋書』巻四〇・賈謐伝に次のように記されている。

或著文章称美謐、以方賈誼。渤海石崇・欧陽建、滎陽潘岳、呉國陸機・陸雲、蘭陵繆徵、京兆杜斌・摯虞、琅邪諸葛詮、弘農王粋、襄城杜育、南陽鄒捷、斉國左思、清河崔基、沛國劉瓌、汝南和郁・周恢、安平牽秀、潁川陳眕、太原郭彰、高陽許猛、彭城劉訥、中山劉輿・劉琨、皆傅会於謐、號曰二十四友。其餘不得預焉。

或いは文章を著して謐を称美し、以て賈誼に方ぶ。渤海の石崇・欧陽建、滎陽の潘岳、呉國の陸機・陸雲、蘭陵の繆徵、京兆の杜斌・摯虞、琅邪の諸葛詮、弘農の王粋、襄城の杜育、南陽の鄒捷、斉國の左思、清河の崔基、沛國の劉瓌、汝南の和郁・周恢、安平の牽秀、潁川の陳眕、太原の郭彰、高陽の許猛、彭城の劉訥、中山の劉輿・劉琨は、皆な謐に傅会し、號して二十四友と曰ふ。其の餘は預るを得ず。

Relation between Two Literati Xijin(西晋)Luyun(陸雲)and Yanyin(厳隠)

Toshiyuki SATO

在文學研究中，把握并理解當時文人周圍的情況，是非常重要的．特別是把握文人之間的交流關係，是一項非常重要的工作．此次本文將對西晉文人陸雲與厳隠的關係加以考察．